5) ニホンザルの胎児型ヘモグロビン
竹中　修・竹中晃子・森本英樹
日本生化学会第50年回大会東京 (1977)

6) ゲラダ，アヌビス，マントヒヒのヘモグロビンの性質—高地適応の観点から
竹　中　　修
第22回プリマーテス研究会 (1977)

7) 霊長類のペプシノーゲンとペプシン— Macaca 属での基本構成成分について
景山　節・高橋健治
日本生化学会第50年回大会東京 (1977)

8) Horseshoe crab coagulogen-Its structure and gelation mechanism. Iwanaga, S., S. Nakamura, T. Takagi, T. Morita, J. S. Finlayson, K. Takahashi and M. Niwa. VIth International Congress on Thrombosis and Haemostasis. Philadelphia (1977).

9) カブトガニの血液凝固因子—内毒素感受性凝固酵素の精製とその性質.
中村　伸・森田隆司・岩永貞昭
丹羽　允・高橋健治
日本生化学会第50年回大会東京 (1977)

10) カブトガニ血球抽出液の凝固酵素を用いたエンドトキシンの新しい定量法.
原田敏枝，森田隆司，中村　伸
岩永貞昭，丹羽　允
日本生化学会第50年回大会東京 (1977)

11) カブトガニ coagulogen の一次構造の研究.
外間安次，高木　尚，中村　伸
森田隆司，岩永貞昭.
日本薬学会第98年回大会岡山 (1977)

系統研究部門

江原昭善・野上裕生
相見満・瀬戸口烈司

系統研究部門では，現在相見満（助手）が昭和52年7月16日～昭和53年7月15日の1年間，インドネシア国における第四紀哺乳類の研究に従事。本研究は国際協力事業団の資金に基づくインドネシアの第四紀の地質調査研究（団長：渡辺直経）の一翼を担うものであり，着実に成果があがっている模様である。

また当研究部門には昭和52年1月から昭和53年7月まで，アンダラス大学のアムシール・バカル講師が，文部省外国人留学生として滞在，その間「霊長類各群の Pterion の形態」について研究し，その成果を第53回プリマーテス研究会で発表した。昭和53年8月から昭和54年3月末日まで，日本学術振興会の外国人共同研究者として，引き続き当研究部門で「霊長類の下顎骨にみられる性的二型の形態学的研究」のテーマのもとに，研究に従事している。

瀬戸口烈司（助手）は昭和52年5月1日～11月30日および昭和53年2月1日～3月30日の9ケ月間，アメリカ合衆国カーネギー自然史博物館において第三紀哺乳類の研究に従事。この研究によりテキサス工科大学から Ph. D. の学位を授与された。昭和52年12月1日より昭和53年1月31月まで，文部省科研費による『南米大陸における広鼻猿類の系統・進化に関する研究』に参加のためコロンビアで発掘調査に従事し，第三紀哺乳類化石を多数収集した。

研　究　概　要

1) 霊長類各分類群の比較形態学的研究
江　原　昭　善
1. 頭部支持機構の比較形態学的研究（継続中）
2. ヒトおよび霊長類下顎角の発達と機能の形態学的分析
3. 霊長類の性的二型の形態学的・行動学的分析
4. 行動の解発因となるメルクマールの形態学的・系統発生学的研究

2) 熱帯アジアにおけるヤセザル類の形態学的・系統発生学的研究
江　原　昭　善

3) 硬組織の形態学的研究
野　上　裕　生
1. 霊長類歯牙の組織学的研究
2. 家畜およびその野生種におけるエナメル質の発達の変異
3. 骨組織の形態研究

4) 第三紀の食虫類・原猿類と有袋類の研究
瀬　戸　口　烈　司

総　　説

1) 江原昭善 (1977)：メンタウエイの孤島にすむサルたち。モンキー，155, 6～13.
2) 江原昭善 (1978)：サルとヒトをつなぐ論理。科学，48, 209～212.
3) 江原昭善(1978)：激動する人類起源論。自然，33, 48～58.
4) 瀬戸口烈司(1977)：ニューギニアの生物相成立史。『ニューギニア中央高地』；朝日新聞社。

論　　文

1) 江原昭善 (1978)：性的二型試論。生物科学，30, 3～10.

2) Setoguchi, T., (in press): Geology and Paleontology of Badwater Creek Area, Central Wyoming. Part 16. The Cedar Ridge Local Fauna (Late Oligocene). Bull. Carnegie Mus.

報告その他

1) 江原昭善・松本真 (1978)：掛川市出土の横穴古墳人骨

学会発表その他

1) シシバナザル (Simias concolor) の鼻骨の形態について

江原昭善

第31回人類学・民族学連合大会

2) シシバナザルの頭骨の形態特徴

江原昭善

第82回日本解剖学会総会

3) 霊長類の性的二型

江原昭善

第5回日本性科学会講演

幸島野外観察施設

岩本光雄（施設長・兼）・森　明雄

幸島をめぐる観光開発や観光客の増大によるフィールド維持の困難さは持続している。この問題は基本的には，国による管理体制をとることが最も望ましい解決法であろう。

52年3月，幸島と本土の間の海域に砂が堆積し，干潮時には陸続きになる現象が起った。このため観光客は自由に渡島でき，またサルが観光客の餌にひかれて本土に渡る可能性ができており，その管理に大きな努力を注いだ。夏には陸と島が離れたが，53年2月再び島が陸続きになり始めた。

≪群れの状況≫

幸島に生息するニホンザルは91頭（53年3月現在）である。51年から目立つようになった夏期におけるメスのヒトリザル化が52年5月頃から再び起った。52年10月頃から，こうしてヒトリザル化したメスが集まり，それにオトナオスのノボリが加わって10頭からなる小グループができた。このグループは交尾期になって再び主群に吸収された。この夏に群れのまとまりが悪くなる現象は，観光客その他の人による影響と考えられ，それを防止するためと，ここ数年，子ザルの成長の遅延が目立ったので，その回復を計るための2つの目的で52年7月10日～9月5日に，毎朝群れに大豆を給餌した。

研究概要

1) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

森　明雄・三戸サツエ
冠地富士男・山口直嗣

前年度からの継続で，ポピュレーション動態に関する諸資料を収集している。毎月1回ほぼ全個体の体重測定を行っている。社会学的研究については，通年の変化や，個々のトピックについて調べている。夏における給餌の結果，季節はずれに，メスの sexual swelling が見られたので，この問題を性成熟および性行動の観点から解析した。

2) ニホンザルの小グループの研究

森　明雄

幸島でできた分裂群は，大変小さなグループであり，このグループの分析を行なうことによって社会構造の骨格を明らかにしようと試みた。

3) 内部寄生虫に関する研究

今田勲（宮崎大）・森　明雄

内部寄生虫卵の季節変化を，毎月1回，個体毎に採糞することにより，定量的に調べた。

なお，52年度に本施設を利用した共同利用研究者は岩本俊孝（宮崎大）である。その他，長期滞在し，利用した研究者は，早木仁成（京大），今田勲（宮崎大），菅原和孝（京大），森梅代（京大）等である。本年度に，本施設を訪問あるいは利用した研究者は，延べ 289人であった。

なお，本年度は，実験室で研究を行なっている大学院生も，院生実習として幸島でフィールド・ワークを行い，大変意義深い経験をした。

論　文

1) 森明雄・森梅代・岩本俊孝(1977)：幸島の野生ニホンザルの群れにおけるメスの間の順位変動について。"形質・進化・霊長類"（加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編），pp. 311–334, 中央公論社，東京。

2) Mori, A. (1977): Intra-troop spacing mechanism of the Japanese monkeys of the Koshima troop. *Primates*, **18**, 331–357.

3) Mori, A. (1977): The social organization of the provisioned Japanese monkey troops which have extraordinary large population sizes. *The Journal of Anthropological Society of Nippon*, **85**, 325–345.

学会発表

1) 幸島におけるニホンザルメスのヒトリザル化と新群形成について

森　明雄

第22回プリマーテス研究会 (1978)